

ヴェーバーのクラリネット協奏曲第2番変ホ長調作品74の背景と作品としての特性

教科・領域教育専攻

芸術系（音楽）コース

細木千裕

指導教官 山根秀憲

[演奏曲目：クラリネット独奏]

カール・マリア・フォン・ヴェーバー作曲

Carl Maria von Weber

クラリネット協奏曲 第2番

変ホ長調 作品74

Konzert für Klarinette und Orchester

Nr.2 Es dur op.74

第1楽章 アレグロ

Allegro

第2楽章 アンダンテ・コン・モート

Andante con moto

第3楽章 アラ・ポラッカ

Alla Polacca

はじめに

カール・マリア・フォン・ヴェーバー (Carl Maria von Weber, 1786-1826) は、短い生涯のうちに、《魔弾の射手》をはじめとする 300 曲あまりの作品を作曲した。このうち、彼が作曲したクラリネット作品は 6 曲もあり、他の著名な作曲家と比べると比較的多く、しかも、これらの作品は 1811 年から 1816 年に集中して作曲された。このような事実は、クラリネット奏者であるハインリヒ・ベールマン (Heinrich Baermann, 1784-1847) と出会ったことが契機になっている。ヴェーバーのクラリネット作品から、我々は、ヴェーバーがクラリネットの特性

を追求した成果を確認することができる。したがって、クラリネット奏者にとっては、非常に興味深く、効果的な演奏のあり方を検討する上で注目すべき作品群になっている。

研究の目的

以上のような見地から、本研究は、ヴェーバーのクラリネット作品を、技巧的な走句と音楽的な効果に着目しながら検討し、特に、研究の対象となる《クラリネット協奏曲 第2番 変ホ長調 作品74》に関して、演奏に向けての課題を検討することを目的とする。

研究の概要

第1章では、ヴェーバーの生涯を4つに区分しながら概観した。第1節では、彼が作曲家として自立するまでの時期に着目し、第2節では、作曲家として、また、楽長として活動を開始した時期を述べた。第3節では、ベールマンとの交流によって作曲された一連のクラリネット作品の創作活動の経緯について述べ、第4節では、彼の晩年にふれた。

第2章では、ヴェーバーが作曲した代表的なクラリネット作品について述べた。第1節では、作品成立の背景を概観し、第2節では、演奏時間と楽器編成の規模を確認した。第3節、第4節では、これらの作品を特徴づけているリズムと旋律の動きに着目し、ヴェーバーのクラリネット作品の全体的な特性について考察した。

第3章では、本研究の対象となる《クラリネ

ット協奏曲 第2番 変ホ長調 作品 74》を詳細に検討した。第1節では、作品が成立した背景を述べ、第2節では、作品の全体的な特性を述べた。第3節では、作品の中にみられる技巧的な走句の特性と音楽的な効果を検討し、第4節では、ここまでの考察をふまえながら、演奏に向けて工夫するべき課題を検討した。

研究の成果

第1章では、ヴェーバーの生涯を概観することによって、一連のクラリネット作品が、ベルマンとの出会いと友好関係によって創作されたことを確認することができた。

第2章では、ヴェーバーが作曲した代表的なクラリネット作品について概観することを試みた。その結果、ヴェーバーのクラリネット作品では、リズム上の仕掛けによって、音楽の雰囲気やエネルギーの変化が効果的に生み出されているという特徴を確認することができた。また、ヴェーバーのクラリネット作品の中にみられた旋律の動きは、広い音域を駆使することが可能なクラリネットの特性を生かしながら、跳躍音程等を含む多様な旋律の動きを効果的に生み出していた。そのことは、技巧的な走句においても、確認することができた。

第3章では、ここまでの考察をふまえながら、《クラリネット協奏曲 第2番 変ホ長調 作品 74》の中にみられる技巧的な走句と音楽的な効果に着目し、演奏に向けての課題を検討した。その結果、《クラリネット協奏曲 第2番 変ホ長調 作品 74》の中にみられる技巧的な走句は、音楽の雰囲気を効果的に高め、多様な表現の可能性を豊かにしていることが確認できた。特に、この作品にみられる技巧的な走句は、単なる技巧的な誇示を目的としたものではなく、ヴェーバーが構想した音楽の創作の結果

として生み出されたものであることが確認できた。

以上のように、楽譜に込められた内容を的確に読みとめることは、演奏者にとって何よりも基礎的な作業になる。その結果、楽譜に込められた内容をふまえながら、演奏者が音楽的な表現のあり方を工夫し、これを具体化する楽器操作上の工夫を試み、演奏者自身の心の内に演奏のイメージを抱くことが可能になる。したがって、演奏上の技術的な問題に対して、実際に練習を行うことが重要であることは言うまでもないが、このことばかりに始終するのではなく、本研究で試みたように、作曲家の音楽的な意図を十分にくみ取った作品研究と演奏の工夫をしていかなければならない。

おわりに

一般に、ヴェーバーのクラリネット作品は、技巧的であると思われる。しかしながら、本研究を通して、ヴェーバーのクラリネット作品は技巧的な側面ばかりが全面に出ているのではなく、技巧的な側面と音楽的な効果によって、作品の内容が豊かになっていることが確認された。したがって、ヴェーバーのクラリネット作品は、技巧的な側面だけを重視する演奏を求めるのではなく、作曲家の意図を十分にくみ取った演奏を追求することが重要である。その結果、作品に対して、また、演奏に対して謙虚に取り組むことが可能になる。今後の課題としては、この作品を別の視点からとらえ直し、研究を深めていきたい。特に、フレージングとアーティキュレーションについて、より詳細な検討を加えていきたい。また、本研究で得た知見と考察の方法を基礎としながら、ヴェーバーのその他のクラリネット作品についても、さらに研究を進めていきたい。